

「健康相談活動」の授業におけるロールプレイングの効果 — 5年間の授業から考察する —

楠 本 久美子

本研究は、将来、養護教諭を目指す学生に「健康相談活動」でのカウンセリング能力の習得方法として、ロールプレイングを用いた学習を行なった結果、学生全員が「養護教諭の専門性が求められる」が、「効果的な健康相談活動と保健指導ができた」及び「連携の大切さを実感した」、「健康相談活動についてもっと勉強がしたい」という積極的な回答を得、ロールプレイングを利用した学習法に教育的効果が見られた。

キーワード：健康相談活動、ロールプレイング、養護教諭養成課程

I. 研究の目的

児童生徒の健康管理の一環として専門的な観点から行われる健康相談活動は、昨今の児童生徒の健康問題の変化に伴い、平成9年の保健体育審議会答申においてはもちろんのこと、さらに中央教育審議会答申（平成20年1月、以下中教審という）においても養護教諭のカウンセリング的健康相談活動の重要性が述べられている。平成21年度に改正された学校保健安全法においても「養護教諭その他の教員は相互に連携して健康相談又は（略）必要な助言を行うものとする」と新たに定められ、養護教諭の役割がますます求められるようになってきた。

そこで、筆者が担当する「健康相談活動」の授業において、最低限の健康相談活動の受け側の対応技術の練習が必要と考える。学校における健康相談活動は予防・開発志向のカウンセリングが主流になるものである¹⁾。という考えを採用し、教育カウンセラー協会のピアヘルパー養成教育の教材^{2,3)}と理論・技法^{4,5)}を利用してロールプレイングを5年間行い、学生のカウンセリング的技術習得効果を5年間に亘って考察したので報告する。

II. 研究の方法

実施は、平成20-24年の5カ年間であり、毎年12月～翌年の1月の2か月間に補講を含めて4回の「健康相談活動」の授業において、養護教諭及び学級担任、保護者との「連携」が学習できるロールプレイングによる模擬健康相談活動を行った。

学生数20名を2班に分け、児童生徒、養護教諭、学級担任、保護者（両親）の5人の登場人物の役割を決め、2名の学生が一人の役割を演じる。5人の人物役になる10名は、内容に沿って演じる口上内容を決めておき、特に養護教諭と学級担任の役割の学生は対応方法について齟齬のないように確認しあっておくこととした。学校医と主治医は筆者が演じることとした。こ

のロールプレイングを行うに当たって、参加できる学生の条件は正規の授業「健康相談活動」にすべて出席していて、「受容・繰り返し・明確化・支持・質問」等の練習も終わっていることとした。さらに学生は、2回生の「学校保健Ⅱ」の授業において、現職の養護教諭による60分間の「健康相談活動」についての講話を聴講している者に限った。

ロールプレイングの練習に使用した課題は、現場での「役割」「実践」を理解させるために実際の健康相談活動に対応された4事例を用いた。

事例の健康相談活動の内容や対応は、日本養護教諭教育学会倫理綱領⁶⁾に則り紹介する。

ロールプレイングを演じる前に、学生たちは筆者の解説を熟知した上で(1)場面設定及び(2)支援方針案を決め、ロールプレイング終了後話し合っ(3)ロールプレイング後のまとめをする(4)とした。(1)～(3)の内容と結果については、個人を特定されることがなく、研究発表に使用することに同意を得ている。

模擬健康相談活動のロールプレイングに使用した4事例は、次の通りである。

①中学3年生女子が冠動脈狭窄症を中学1年次に発見されて以来、運動制限のため毎年の体育祭を見学しなければならないことに反発し、体育祭の大縄跳びに自分も参加したいと言い張った。学級担任が指導困難を感じての健康相談の依頼があった。その対応について、②中学校2年生の男子が、幼少から喘息発作を頻繁に起こしていて、運動制限をしている。発作があればその都度保護者に来校してもらい、一緒に早退させていた。保護者は喘息を通院しながら治療するのか、約半年間入院して治療するかを迷っていることに対して学級担任から健康相談の依頼がある。その対応について、③高校2年生女子は教室に入るとおならがでるので、おならの出ない食事内容を自分で調べて調理し、食べるようになってから痩せだし、学級担任が心配して健康相談を依頼してきた。その対応について、④中学2年生女子がクラスのほぼ全員から無視され、欠席しがちとなった。学級担任が保護者に電話して登校を勧めた。生徒は、登校はできるが、教室には入れないというので、学級担任は保健室登校を兼ねて健康相談を依頼してきた。その対応について、学生は筆者の解説を十分理解した上で、指導方針を定め、ロールプレイングの場面設定を行った。

実施前に学生たちに次の点に注意させた。1) 学生全員で生徒の家族関係や学業成績、友人関係等の情報を基に演者の演じる内容や口上について設定する。2) 生徒の気持ちを十分想像して演じる。3) 養護教諭としての役割が発揮できるような場面づくりを意識する。4) 養護教諭及び学級担任、保護者との連携を意識したロールプレイングをすることとした。

場面設定での養護教諭と学級担任の年齢については、養護教諭を2～4年勤務歴とし、学級担任を「中堅の男性学級担任」とした。

Ⅲ. 結果

1. 中学3年生女子が冠動脈狭窄症について

(1) 学生(1)の場面設定は、次の通りであった。

学級担任は養護教諭と相談し、まず学校医の健康相談を学級担任とともに本人及び保護者が受けるよう勧める。学校医は、医療専門の立場で、将来は運動できるが、今は運動制限が必要

であることを強調する。養護教諭と学級担任は連携して本人が希望する大縄跳びの参加を拒む。しかし、将来は運動制限が少なくなることには希望を持たせる。母親は本人が母親の言うことを一切聞かないので、本人の希望をかなえてほしいと願っていて、運動したがる子どもを諭すことができないでいるという設定をした。

(2) 学生の支援方針案は、次の通りであった。

学級担任は、学校医の指導方針を守り、生徒の対応に当たる。本人の気持ちをよく聞いて、どうしたら良いか一緒に考えて行くことにする。また、本人及び保護者の了解を得て、クラスの生徒たちに運動制限があることを伝え、本人が参加したがっている大縄跳びを体育祭ではクラス参加しないことに理解と協力を求めると約束する。

養護教諭は、本人の「運動したい」という気持ちを受け止め、将来運動ができるという希望をもたせ、今は自分の健康を大事にすることが大切であることを理解させる。

母親の不安を軽くするために、養護教諭が定期的に相談を行うことを約束する。また、養護教諭は学校保健委員会で報告し、関係職員に健康観察等の協力を求める。

(3) ロールプレイング後の学生のまとめ

学生の意見は、表1のように、活発に運動したい時期に運動制限を強いられることは大きなストレスになりやすいことや生徒本人に運動制限の意義を理解させることが難しいことが解った [18人 (90%) ~ 20人 (100%)]。運動制限のためストレスが高じていることに対して周囲の友人に理解と協力が得られたことがよかった [20人 (100%)]。という意見に集中していた。

表 1. 中学3年女子の冠状動脈狭窄症についてのロールプレイング後の学生の感想

	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
	n=20	n=20	n=20	n=20	n=20
1. 運動制限はストレスになることが解った。	20 (100)	19 (95)	20 (100)	18 (90)	19 (95)
2. 運動制限の意義を理解させることの困難さがわかった。	18 (90)	19 (95)	18 (90)	20 (100)	18 (90)
3. 周囲の友達の協力が得られたことがよかった。	20 (100)	20 (100)	20 (100)	20 (100)	20 (100)

2. 中学校2年生の男子の喘息発作について

(1) 学生の場面設定は、次の通りであった。

母親は、子どもが喘息発作を頻繁に発症して、学校に呼ばれるため子どもの喘息について嫌気をさしている様子で、子どもに対して冷たい態度である。養護教諭は母親の気持ちを理解して、治療に前向きになれるよう支える。

養護教諭は母親の了解を得て一緒に主治医と面談することを約束する。主治医には学級担任も同席し、学校での生徒の様子を説明し治療方針について相談する。一方、生徒本人に、養護教諭は健康管理の面から、学級担任は学業の面から希望を聞き、半年間の入院生活が本人に良

い結果になるよう教育的配慮を約束する。

(2) 学生の支援方針案は、次の通りであった。

喘息の生徒は、入院中、病院の附属特別支援学校に入学して治療を受けることになる。入院中の欠席や学業中断のないよう特別支援学校のエデュケーションが受けられるが、治療が優先であるので、学級担任は定期的に見舞って学習指導を行い、学習の遅れがまたストレスとなって喘息誘発に繋がらないよう配慮する。

(3) ロールプレイング後の学生のまとめ

学生の意見は表2の通りである。長期に亘る喘息のある子どもの母親は、看病疲れもあって、子どもに冷たい態度になりがちのため、子どもは親に対する不信感をいだき結果になっている[19人(95%)～20(100%)]のではないかと考えていて、子どもと保護者を同時に支援することが大切だ[14人(70%)～18人(90%)]と感じている。また、入院中の学業の遅れの不安や友人に会えないことなどの心理面のつらさを理解して、学級担任が入院中の級友の見舞いや手紙を送ったり、学習支援をしたりするなどの配慮の必要性も理解している[19人(95%)～20人(100%)]ことが解った。病院に附属している特別支援学校の存在意義については漠然としたイメージだけであったようだが、今回の事例で、全学生が附属特別支援学校の仕組みや役割についてよく理解できたようである。

表2. 中学校2年生の男子の喘息発作についてのロールプレイング後の学生の感想

	20年度 n=20	21年度 n=20	22年度 n=20	23年度 n=20	24年度 n=20
1. 母親もストレスになっているので支援が必要であることが解った。	16 (80)	14 (70)	17 (85)	15 (75)	18 (90)
2. 母親への不信感があり、級友の見舞いや手紙、学習支援等の愛情のある支援も必要だと解った。	20 (100)	20 (100)	19 (95)	20 (100)	20 (100)
3. 病院附属特別支援学校の役割がよく解った。	20 (100)	20 (100)	20 (100)	20 (100)	20 (100)

3. 教室に入るとおならがでることをきっかけに、自分の手料理だけを食べて痩せだした高校2年生女子の対応について

(1) 学生の場面設定は、次の通りであった。

保護者の代理で小学校教員の姉に来校をお願いして、養護教諭と学級担任と面談する。学級担任は、姉に現状を説明し、教員の立場で教え子が痩せてきた場合の対応と同じように妹さんに対する健康観察をお願いする。養護教諭は姉に生徒が痩せてきた理由や家庭での様子を聞く。姉は妹が自分で料理していることや痩せてきていることも知っているが、妹は元気であると主張する。

養護教諭は生徒に対して手料理を食べるいきさつについて受容と共感をもって聞く。生徒は

教室に入るとおならがでるようになったので、おならの出ない食事内容を自分で調べてカロリー計算もして調理し、お腹の調子が良くなっていくうちに徐々に痩せだした。現在、標準体重の3Kg少ない程度だが、皆からほっそりしてきれいと言ってくれたと自慢げに言う。友達から肥えているという一言が気になりだし、教室に居られなくなったと本心を明かす。養護教諭はこれ以上に痩せたり、健康面でおかしいと思ったりしたら保健室に来てねと約束させる。生徒は痩せすぎになった時に保健室に来て、健康に支障をきたすと気づき、標準体重の維持に努めると約束する。

(2) 学生の支援方針案は、次の通りであった。

生徒は、教室に入るとおならが出るので、過敏性大腸炎に似た傾向が見られるため、症状が再発した場合は、専門医の受診を勧める。学級担任と連携して健康観察及び健康相談を継続し、定期の学校医の健康相談も受けさせ、痩せ過ぎにならないよう自己管理できる実践力を養わせる。

(3) ロールプレイング後の学生のまとめ

学生の意見は、表3の通りである。友人の一言が引き金となって過敏性大腸炎のような症状になり、痩せてしまった事例は少なくないを考える。親しい間柄であっても容姿に関しては慎重に発言しなければならないと解った [20人 (100%)]。また学生たちは、生徒が痩せすぎに気づき、標準体重の維持に努めると約束できたのは、養護教諭の専門性を活かした健康相談の効果である [20人 (100%)] と考えた。学級担任が姉と面談して、健康観察をお願いしているが、全員の学生が学級担任の行なう健康相談及び保健指導の役割を理解していた。

表 3. 自分の手料理を食べて痩せだした高2年女子についてのロールプレイング後の学生の感想

	20年度 n=20	21年度 n=20	22年度 n=20	23年度 n=20	24年度 n=20
1. 容姿に関する発言は慎重にしなければならないと解った。	20 (100)	20 (100)	20 (100)	20 (100)	20 (100)
2. 養護教諭の専門を活かして効果的な健康相談活動と保健指導ができた	20 (100)	20 (100)	20 (100)	20 (100)	20 (100)
3. 学級担任が行なう健康相談、保健指導の役割が理解できた。	20 (100)	20 (100)	20 (100)	20 (100)	20 (100)

4. クラスのほぼ全員から無視され、欠席しがちとなった中学2年生女子の対応について

(1) 学生の場面設定は、次の通りであった。

生徒は成績が良く、学級担任から信頼されていて、明瞭で利発な人柄であるが、級友に無視されてからは戸惑いと不安を感じている。養護教諭と学級担任は、いじめの首謀者に嫉みを買われたと推測するとともに、不安を抱く生徒の心情を理解し、保護を優先することで一致した

対応をとる。養護教諭は、生徒の戸惑いと不安について共感を持って聞き、クラスにもどれるまで保健室登校するよう勧める。学級担任は早急にクラス全員に無視された者への心理を理解させ、生徒がクラス復帰できるよう努力することを約束する。

(2) 学生の支援方針案は、次の通りであった。

無視する行為はいじめの典型であり、学級担任は生徒が教室に復帰できるように、先ず首謀者と首謀者に加担する者に対する指導を行なうとともに、生徒たちにいじめをしない、させない学級であることの大切さやいじめ根絶の意義を理解させ実践できる雰囲気作りを進める。一方、養護教諭は生徒に無視された状況を思い出したくない気持ちを大事にし、不安な心境を聞くことによって、自信が取り戻せるように支援する。不安になったり、恐怖感が沸いたりした時は、いつでも保健室は休息できる安全な場所であること伝え、信頼関係構築に努める。

(3) ロールプレイング後の学生のまとめ

学生の意見は、表3の通りである。

学生は、いじめの典型である無視される行為を受けて傷つく被害者が実際にいることに既に学習しているためか、驚く人は少なく〔6人（30％）～11人（55％）〕、首謀者に教師として指導することに不安を感じていて〔12人（60％）～15人（75％）〕、いじめを受けた生徒やいじめに対応する教員への支援方法をもっと学びたいと実感していた〔20人（100％）〕。

表4. 級友から無視され、欠席しがちの中学2年生女子の対応についての
ロールプレイング後の学生の感想

	20年度	21年度	22年度	23年度	24年度
	n=20	n=20	n=20	n=20	n=20
1. 集団による無視するいじめの実態を知って驚いた。	9 (45)	7 (35)	11 (55)	6 (30)	6 (30)
2. いじめの首謀者に教育的な指導は困難さがあるが、指導すべきである。	15 (75)	12 (60)	15 (75)	13 (65)	13 (65)
3. いじめを受けた生徒や対応する教員への支援方法をもっと学びたい。	20 (100)	20 (100)	20 (100)	20 (100)	20 (100)

5. 4例のロールプレイングを終えてのまとめ

全てのロールプレイングを終えての学生の感想は、表5の通りである。

臨場感のあるロールプレイングを実現させることは難しいと思うが、学生のほとんど〔17人（85％）～20人（100％）〕が臨場感を持って熱心に取り組んでいた。

全員の学生が、「連携の大切さを実感した。」「養護教諭の専門性が要求される。」「健康相談活動についてもっと学習が必要である。」と回答している。

表 5. 4 例のロールプレイング後の学生の感想

	20 年度	21 年度	22 年度	23 年度	24 年度
	n=20	n=20	n=20	n=20	n=20
1. ロールプレイングして臨場感を もてた。	17 (85)	17 (85)	18 (90)	17 (85)	20 (100)
2. 連携の大切さを実感した。	20 (100)	20 (100)	20 (100)	20 (100)	20 (100)
3. 養護教諭の専門性が要求される。	20 (100)	20 (100)	20 (100)	20 (100)	20 (100)
4. 健康相談活動及びカウンセリング による対応方法をもっと勉強し たい。	20 (100)	20 (100)	20 (100)	20 (100)	20 (100)

Ⅳ. 考察

教科の「健康相談活動」は平成 9 年の保健体育審議会答申により「心の健康問題と身体症状」に関する知識理解、これらの観察の仕方や受け止め方などについての確かな判断力と対応力（カウンセリング能力）…（略）…が必要であると提言され、文部科学省は養護教諭養成課程における方策として「養成課程においては、養護教諭の役割に伴う資質を担保するため養護教諭の専門性を生かしたカウンセリング能力の向上を図る内容などについて、質・量ともに抜本的に充実する」として設置された教科である。

今回は、文部科学省の養護教諭養成課程における方策の目的を参考にして、カウンセリング能力を身につける一つの方法として授業の中でロールプレイングを 5 年間実施し、教育効果を学生の意見からまとめた。

その結果から授業の効果は次のように考えられた。

1. 身体症状に関する対応について

今回のロールプレイングで利用した課題は「①中学 3 年生女子の冠動脈狭窄症について」「②中学校 2 年生の男子の喘息発作について」の 2 例である。どちらも身体症状についての知識の対応だけでなく、心理面での対応が要求される内容であった。

①中学 3 年生女子の冠動脈狭窄症については、学生たちの 18 人（90%）～ 20 人（100%）が、運動制限によるストレスが平常な心理状態に保てないことを理解していた。同じく病人の心理を理解しながらも運動制限の意義を理解させることの困難さも理解できていた。今回の事例は、成長するとともに運動制限が少なくなっていく症例であるので、生徒に運動できる将来の希望があり、対応しやすいが、運動制限が解かれる見込みのない病人の対応については、かなり困難さを感じるのではないかと推測する。しかし、学生たちの支援方針が学級担任と連携して行なうとしているので、教育現場において実際に対応する時は、学級担任と協力しながら困難を乗り越えられると推測し、意義あるロールプレイングだったと考える。

②中学校 2 年生の男子の喘息発作については、症状に対する知識と保護者への支援方法につ

いての知識が要求される。学生は子どもと保護者を同時に支援することが大切だ[14人(70%)～18人(90%)]と考えているが、この事例では子どもが入院して治療すべきか否かの判断に困っている母親の支援がほとんどであるので、養護教諭の知識が生かされる反面、主治医の病院に出向くなどの行動しなければならないことに賛成し難い[2人(10%)～6人(30%)]という学生もいた。実際に対応する状況によっては、主治医の病院まで出向く必要のない症例もあり、養護教諭となった時には、臨機応変に対応してほしいと願う。

母親に対する不信感の有無に関わらず、学級担任が級友の手紙を送ったりすることは、病人にとって励ましになり、主治医の許可を得られているのなら、級友が見舞うことも好ましいと考える。学生のほぼ全員が学習支援をしたりするなどの配慮の必要性も理解している[19(95%)～20人(100%)]ことが解った。筆者のゼミ生には、病院附属特別支援学校に長期のボランティア活動をしている学生がいるが、実際に活動する機会がなければ、附属特別支援学校の仕組み等を知ることはないと思われるので、この課題のロールプレイングは特別支援学校の学習としても意義があったと考える。

2. 心の健康問題に関しての対応について

今回のロールプレイングでは、「③おならを止めるために自分の手料理を食べて痩せだした高2年女子について」、「④級友から無視され、欠席しがちの中学2年生女子の対応について」の2題である。

③おならを止めるために自分の手料理を食べて痩せだした高2年女子については、拒食症とよく似ている事例であるが、典型的な拒食症ではないので、養護教諭の専門性を生かせる事例と考え、ロールプレイングの課題として取り上げた。

学生全員が、養護教諭の行なう健康相談活動は保健指導も兼ねていて効果的であるとしているように、生徒が痩せすぎになってきた時、生徒本人がこれ以上痩せないよう努力して自己管理できたのは、養護教諭の専門性を生かした保健指導が功を奏したからと考えているようである。また学生全員が学級担任の行なう健康相談及び保健指導の役割について意義を理解したことは、養護教諭の役割だけでは成功しないことをも認識できたと推測する。学生は養護教諭の専門知識の重要性及び学級担任との連携の良さの必要性に気づいたものと推測し、意義あるロールプレイングであったと考える。

④級友から無視され、欠席しがちの中学2年生女子の対応については、学生たちは、無視するいじめがあることは調査報告書から知っていたが、ほとんどの級友が一斉に無視する集団心理が理解できず、6人(30%)～11人(55%)の学生は、実際に集団でいじめられることに驚いていた。

12人(60%)～15人(75%)の学生は、知識として首謀者に反省させることや今後同じような過ちを犯さないように指導することは多分理解しているであろうが、学級担任の指導力よりも指導困難さの方が大きいと考えていた。このことから、学生全員が生徒と教員への支援方法をもっと学びたいという結果から、養護教諭も学級担任も生徒への継続的な支援の必要性を考え、いじめの予防と早期発見のためにもさらなる相談活動の力量向上に励まなければならないと実感したと考える。学生全員が研鑽意欲を持ったことについて意義ある課題であったと

考える。

3. ロールプレイングを全て終了して、全員の学生が、「連携の大切さを実感した」「養護教諭の専門性が要求される。」「健康相談活動についてもっと学習が必要である。」と回答しているので、今回の学習方法に意義があったと考える。

V. 結論

今回、教科「健康相談活動」において養護教諭の専門性を活かしたカウンセリング能力を身につけるために12月から翌年の1月までの4回のロールプレイングを平成20-24年の5年間に亘って、学生10名の2グループに「心の健康問題と身体症状」4事例の対応等の仕方を学習させた。その結果、全員の学生が、「級友の協力が得られて良かった」ことや「病院附属特別支援学校の役割がよく解った」こと「容姿に関する発言は慎重でなければならない」気づきや「養護教諭の専門性が要求される」が「効果的な健康相談活動と保健指導ができた」こと、「学級担任の役割が理解でき」、「連携の大切さを実感した」、「健康相談活動についてもっと学習が必要である。」と回答していたので、教科「健康相談活動」において行なったロールプレイングは意義深い体験学習であったと考える。

参考文献

- 1) 國分康孝：カウンセリングの原理、誠信書房 1996
- 2) 國分康孝：ピアヘルパーハンドブック、図書文化 2002
- 3) 國分康孝：ピアヘルパーワークブック、図書文化 2002
- 4) 國分康孝：カウンセリングの理論、誠信書房 1980
- 5) 國分康孝：カウンセリングの技法、誠信書房 1979
- 6) 日本養護教諭教育学会倫理綱領、日本養護教諭教育学会 2010

